

青梅市文化財ニュース

第 3 7 7 号

平成 3 1 年 3 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

マリシテンサマ

旧青梅宿の西端にある裏宿は、森下陣屋の背後から日向和田村境までの区域にわたり、かつては、旧青梅宿の 10 組(町内)のうち 2 組を占める広い町内で、上裏宿組と下裏宿組に分かれていました。また裏宿町内には、古刹金剛寺の末寺・来迎寺(廃寺)や町内の鎮守・^{まりしてんさま}摩利支天様がありました。

摩利支天様は現在、J R 青梅線の線路脇にあります。かつては、上裏宿の北方の山の上、永山丘陵ハイキングコースと黒沢・飯能地区への近道と交わるところに位置していました。位置から考えて相当古い時代からあったものと思われます。

青梅街道北側の下裏宿の方から山の上を見ると、秋になると色づいた銀杏の木が見えます。その銀杏の木のあたりが、かつて摩利支天様があった場所です。

上裏宿(町内西方)の青梅街道から摩利支天様までの道は、安政 7 (1860) 年の個人所有の文書によると、6 尺 5 寸幅の参詣路で^{まりしてんどう}摩利支天道と呼ばれていました。

その入口には、石燈籠(常夜燈)が置かれて、真っ暗な江戸時代の青梅街道の夜を照らしていたと思われます。しかし、昭和 30 (1955) 年頃に道路拡幅工事が行われることになり、山の上にあった摩利支天様の石段下に移されました。

この石燈籠には「文政 5 (1822) 年正月吉日」「献摩利支天」「両組中」と文字が刻まれています。両組中とあるのは、上裏宿と下裏宿の両町が協力して建てたということです。

さらに、石燈籠から石段を 48 段上がったところに、手水鉢と「般若心経拾萬巻」の石碑が、また、そこから 15 段上がったところに、もう一つの「般若心経拾萬巻」の石碑が建っています。どちらの碑も年月日等が磨滅していて、判読することが出来ませんが、明治 11 (1878) 年頃の『皇国地誌』には「般若心経拾萬巻 文政十丁亥(1827)吉日 両組中」とあるので、少なくとも片方の石碑は文政 10 (1827) 年に建てられたものと思われます。地域の人達の信仰を通した結束を感じます。

摩利支天様は『皇国地誌』によると「梵(字)奉造立摩利支天宮守護所延享二乙丑(1745)歳五月吉祥日 大工大柳雨宮政清傳六 遷宮導師金剛寺 海性代」という古い棟札がありました。

慶応 4 (1868) 年 3 月の神仏分離令により社号が山祇大神社となりました。

明治 22 (1889) 年 6 月 15 日夜、雷による火災で社殿が焼失してしまいましたが、同年 12 月 1 日に世話人 10 名により、社殿が再建されました。

再建された摩利支天様の社殿は、^{わりはいでん}割拝殿造り、屋根は^{こけらぶ}柿葺き、軒ぞりのある^{しげたるき}繁垂木、入母屋造りで、その後、トタン葺きに改装されましたが、風格のある建物でした。

天保 6 (1835) 年の住吉神社拝殿の天井の雲竜図などを描いた、仲町居住の小林天淵が^{きごう}揮毫した^{のぼりばた}幟旗を所蔵しています。

また、江戸四谷塩町、赤坂などに住み、江戸城大奥の御用商人で漆器商を営んでいた山田早苗の『玉川派源日記』（天保12年頃）には「裏宿北の山上に摩利支天尊の祠あり。例祭二月朔日、参詣群集せり」と記録されています。

その後、4月1日にお祭りが行われ、参道には提灯が灯され、露天が出店したり大変賑やかだったそうです。また、毎月1日と15日には大勢の方が、参拝していました。

祭礼の時は、前夜から年番が泊まり込みで「おこもり」をしたと伝えられています。昭和20年代頃まで「いろり」に火をおこし、子供達も参加し、一晩で炭1俵を使い、窓にゴザを下げた風よけをして、寒さを防いだそうです。

4月1日の祭り当日は、旧公会堂の近くに舞台が組み立てられて、あきる野市の二宮芝居などが行われ、大変賑やかでしたが、住吉神社の青梅大祭に加わることでなくなりました。

その後、永山丘陵にあった摩利支天様の社殿は、老朽化により町内で建替え等が検討され、平成15(2003)年に現在の場所に裏宿神社として、改称遷座^{せんざ}し、現在の新しい社殿が新築されました。

古い拝殿にあった多くの絵馬や青梅織物の染色作業を描いた大きな絵馬は今も保存されています。

お話を伺った方(敬称略) 齋藤慎一 三田野民治

(文責 東山 啓子)



「般若心経拾萬巻」の石碑